

<p>上演9</p> <p>2025年7月27日（日）4校目 東北ブロック（青森）</p> <p>青森県立青森中央高等学校</p> <p>「あの子と空を見上げる」</p>	<p>第49回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第71回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員 愛知県立愛知商業高等学校 酒井 梓衣</p>
---	---

この作品は人間と鬼という異なる存在を通して、戦争や差別、正義とは何かを問いかけてきた。舞台には一切の大道具がなく、効果音も役者たち自身が生み出しており、「人が演じること」そのものに集中できる演出がなされていた。視覚的な装飾を排除したことで、言葉や動き、間の使い方がより際立ち、観客は登場人物たちの心情に深く入り込むことができた。

物語はモモカという人間の女子高生が、鬼ヶ島にある鬼の高校に「仲良くなりたい」という純粋な思いで飛び込むところから始まる。人間と鬼とが対立してきた歴史がある中で少数派であったモモカの声が広がり、「鬼との共存ができる」という希望が見えかけた。だが、人が増え多数派になった瞬間、差別の声が再び展開される光景には、我々が生きる現実を示唆するようで、どうしようもないやせなさを感じた。この劇では、差別や偏見が根強く残る現実をファンタジーの形で描いているが、その理解のしやすい表現が現実の痛みを如実に浮かび上がらせていた。

作品全体を通して問い続けられていたのは、「正義とは何か」というテーマである。鬼と人間、それぞれの立場で語られる正義が食い違い、争いが起きる。どちらにも自分たちの「理由」があり、どちらにも自分たちの「正義」がある。それでも「暴力を振るうことは正義ではない」と強く伝えるラストには、昔から私たちが行ってきた戦争の愚かさ、それぞれ正義を全うするために行われる行為の恐ろしさが重なって見えた。私たちは自ら他人と“違い”を見つけ、そこに線を引き、自分たちの“普通”を押し付けてしまう。争いは異なるものが存在するからではなく、それを受け入れられない心から生まれるのだと気づかされた。モモカの登場は希望であると同時に悲劇の始まりだった。「来なければよかった」という感情と、「来てくれてよかった」という思いが交錯する中で、戦争をする人間の身勝手さや愚かさが浮かび上がった。

最後のドローンによる攻撃を想起させるようなシーンでは、客席側を向いていた照明が明るくなり、舞台上の人物達が一斉に倒れる。音も動きも止まった長い長い“間”に、嫌な静けさと起きてしまった取り返しのつかない現実への無力感を私達は味わった。その時間は、「私はただ見ていただけでいいのか?」「でも何も出来ない。」という葛藤を自然と心に呼び起こさせる力を持っていた。さらに、爆弾によって鬼と人間が諸共に焼き焦げてしまったことで違いがわからなくなっている演出も、私たちは争いによって善も悪も見境なく傷つけてけてしまう



ことを語りかけるようで印象的だった。焼け野原になった後も空は青かったという描写には、絶望の中にわずかな希望を残すような美しさがあった。残酷で、救いようのない現実を描きながら、それでも「この現実を私達は見続けなければならない」と思わせる、強く誠実な作品だった。

今の世の中に強く語りかけるとても素敵な舞台をありがとうございました。青森中央高校の皆さん、お疲れ様でした。